

元日參賀は、三家三卿の方々よりはじめ、譜代の大名小名、百の司々、皆城にのぼりて拜賀す。○
略 三家のかたぐい、溜の間詰、宿老の人々、侍從四位の輩は、白木書院にてかはらけ給ひ、おのおの
の吳服一重ねをたまふ、それより大廣間に渡御有りて諸の大名、五位以上の輩、百の司々、法印
法眼のたぐひまで、御まへにして大みきの流を給ふ、是を大流と云、皆吳服一かさねづ、をた
まひ、かづきつれてまかづ、入御ありて後布衣の輩に流れを給ひ、諸さぶらひ番士のたぐひ同
朋にいたる、これを小流と云、此日四品より上つかたの輩は、太刀折紙みづからもて出てこと
ほぎをのぶ、それより下つかたは、太刀折紙前に置て拜謁す、
二日は、大廣間にて國主の面々ひとしく、出て拜賀し、相伴の座につらなれば、番頭の輩ひきわ
たしもて出づ、やがてかはらけ賜り、各吳服一かさねを給ひてまかづ、のち外様の大小名及び
昨日残りし有司の輩、小流れを下され、祿給ふ事、すべて元日にかはる事なし、兩御所の奉りも
のも又おなじ。

三番 右 三日參賀

春立ていく日もあらぬに玉くしげ三たびとなふる松の萬代略○中

三日の參賀は、無官の面々松の廊下に列り、井伊、榊原、奥平の家の老ども、その末に有て拜賀す、
入御の折との、中ゆるされたる市の長どもを始め、京、大坂、堺、奈良、伏見、過書、銀座等のものども
も皆なみゐて、遙にをがみ奉る也。

〔禮容筆粹七〕御流之事 御流とは、大名高家我が下さまの家人に被下次第也、主人の御前に土
器を幾つも臺につみかさね、主人のきこしめしかけられたる酒を、其かはらけにうつし、段々
下へうつしつたへ、兩銚子のわたりの上にかはらけをのせて、御酌持參する也、其時頂戴の人
出て御禮を申、土器を取いたゞき酒をうけて、不戴吞て、土器を持罷立なり、